2023年（令和5年）11月1日（水）　柏崎日報

拉致解決へ 小学生視点で

柏崎など関係3市 オンライン会議 初試み

拉致問題について柏崎など3市の児童が学習の成果を発表し合ったオンライン子ども会議＝31日、荒浜小

北朝鮮から帰国した拉致被害者が住む柏崎市と佐渡市、福井県小浜市の3小学校で31日、「拉致問題を考えるオンライン子ども会議」が開かれた。市内からは荒浜小（笠原道宏校長）の6年生29人が参加。拉致問題の早期解決を願い、学習の成果を話し合った。

拉致問題への関心を高め、風化を防ごうと、3市でつくる「拉致被害者関係市連絡会」と各市教育委員会が初めて企画した。荒浜小のほか、佐渡市真野小の5年生と小浜市加斗小の5・6年生をオンラインでつなぎ、各校が拉致問題学習の成果を披露した。

冒頭、北朝鮮に拉致された横田めぐみさん＝失踪当時(13)＝の弟で、「北朝鮮による拉致被害者家族連絡会」の横田拓也代表がビデオメッセージで、「親世代が健全なうちに解決する必要があり、時間的制約のある問題。拉致問題に関心を持ち続け、我が事で向き合ってほしい」と呼び掛けた。

荒浜小6年生は人権教育の一環で、市内在住で北朝鮮による拉致被害者の蓮池薫さん(66)から当時の話を聞くなどして9月から学習を進めてきた。この日の発表で、子どもたちは拉致について「残酷で大切なものが奪われる」「何気ない日常が一瞬でなくなってしまう」などと訴えた。

その上で、拉致問題の啓発などに向け、チラシやポスターの制作、署名活動の実施を発案。提言として「拉致問題を忘れない、広めよう」と声をそろえた。真野小や加斗小の発表では、政府への手紙送付などの提案が出され、拉致問題解決を目指し、小学生目線で何ができるかを発表し合った。

今後、荒浜小6年生はチラシの配布や署名活動など校外学習で行う予定。中村芹菜さんは学習を通して、拉致問題の早期解決への気持ちを強くした」、柴野陽登君は「風化させないためにも、幅広い世代に伝えることで関心が広がっていけばいい」と願った。

荒浜小には蓮池薫さん（右）が同席。子どもたちに「解決のため何ができるか踏み込んでいて感動した」と呼び掛けた＝同

各校には拉致被害者の蓮池さん、曽我ひとみさん（佐渡市）、地村保志さん（小浜市）が同席した。荒浜小で子どもたちの発表を見守った蓮池さんは「小学生が拉致問題で一歩踏み出した動きを見せるのは全国的にも初めてではないか。（今回の会議は）とても大きなことで力強く思うし、この動きを広めていきたい」と期待した。

「モンゴルを知る90分」

国際化協会が25日

県国際交流協会、柏崎地域国際化協会が25日午前10時～11時半に、2023年度の国際理解セミナー「アジアから世界を知る」を市民プラザで開く。県内4会場でセミナーを行っており、この一環。柏崎のテーマは「モンゴルを知る90分」、申し込みは17日まで。

セミナーでは、モンゴル地域の歴史、生活、自然環境、風俗習慣の移り変わりと現状、モンゴル語（文字）の成り立ちについて、日本語との比較を交えて解説する。講師は新潟産大講師の蒼原鳥瑠吉（あおはら　うりじ）さん。

定員は対面が30人、オンラインが40人（いずれも先着）。問い合わせ、申し込みは直接または電子メール、ファクスで住所、氏名、電話番号を記入し、同協会（電話ファクス32・1477、メールkaia2006@kisnet.or.jp）へ。

柏崎以外では、18日午後1時半～3時に、上越市頸城区公民館南川分館でセミナー「あなたに伝えたい！フィリピンの魅力！」。講師は新潟フィリピン協会会長。問い合わせは県国際交流協会（新潟市中央区、電話025・290・5650）へ。

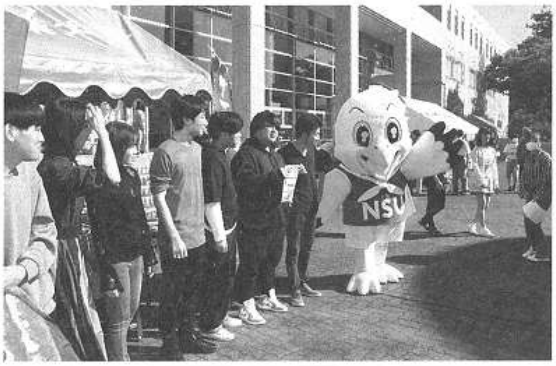
新潟産大「紅葉祭」

マスコット初お目見え

新潟産大の学園祭「紅葉祭」（同大学友会、学生実行委員会主催）でマスコットキャラクター「サンチャッカル」の着ぐるみが初めてお目見え。一緒に記念撮影する来場者もいて人気を集めた。

同大では、2020年は新型コロナウイルス感染拡大防止のため紅葉祭を中止し、21年と22年は大学関係者のみで開催。今年は4年ぶりに先月14、15日、一般公開された。学内外で模擬店やイベント、お笑いライブ、綾子舞公演などが多彩に繰り広げられた。

マスコットキャラ「サンチャッカル」は柏崎の海と、世界へはばたく人材の育成との観点から「カモメ」をイメージしたもので、05年に誕生。名称は産大の「サン」と、カモメを意味するロシア語「チャ」、朝鮮語「カルメギ」を組み合わせた。着ぐるみ製作のほか、缶バッジをスタンプラリーの景品にし、来場者に大学をPRした。



新潟産大マスコット「サンチャッカル」の着ぐるみが初お目見えした紅葉祭

また本年度は1年生必修の「基礎ゼミ」にイベント企画も課題として取り上げた。このうち韓国発祥スイーツの模擬店「柏崎クロッフル」も登場。クロワッサンの生地を割り箸に巻き付け、ワッフルメーカーで焼き上げ、柏崎産越後姫ジャムを使用したもので、佐野也哉子さん（1年）は「学園祭に参加できてうれしい。昨年オープンキャンパスに来たときよりもにぎやか。夏休み前に出店内容を決めたが、準備期間が短くて大変だった。地元の越後姫ジャムで柏崎らしさを出したかった」と店頭で大忙しだった。

実行委員長の本田翔大さん（2年）は「久しぶりの一般公開だった。以前の紅葉祭を知らない中で、『黎明』をテーマに、地域としての学園祭を新たに作り上げ、これから先も多くの人たちから楽しんでもらいたいという思いを込めた」と話した。

○

学園祭に合わせ、通信教育課程「ネットの大学managara」のオフ会も同大で開かれた。4月に入学した石橋風雅さん(19)は北海道からカーフェリーで訪れ、「オンラインで顔を合わせていたが、リアルな大学や学生は初めてでワクワクする」とし、模擬店など大学構内を見て回った。

2023年（令和5年）11月7日（火）　柏崎日報

新潟産大・住吉副学長

共著で教育の方向性説く

「課題解決能力」提言

新潟産大の住吉廣行副学長が元小学校教諭で教育学者の今泉博氏との共著「小学校と大学で未知に挑む力はこうして育つ」（子どもの未来社）を出版した。それぞれの視点から「児童・学生が自ら課題を設定し、解決する力」の育て方などを紹介している。

住吉副学長は、理論物理学、大学教育などを専門とし、2012年から20年9月まで松本大で学長を務めた後、23年4月に新潟産大副学長に就任。地域社会と連携した課題解決型の大学教育を実践する。今泉氏は04年まで東京都の公立小学校で勤務した後、北海道教育大副学長、松本大教育学部教授などを歴任。間違いや失敗を積極的に評価し、子どもたちが生き生きと学ぶ授業を創り出した。

同書の第1部で、今泉氏は小学校教員時代の授業手法を例に、子どもも教師も楽しく学べて明日が待ち遠しくなる授業のための課題を挙げた。第2部では住吉副学長が「知識修得型」の教育から、正解の定まっていない問題を前にして必要な「課題解決能力育成型」教育への転換を提言。前任の松本大で行われていた地域と連携した教育実践の事例を挙げた。

また住吉副学長は「松本大は地域社会の課題解決を地域住民との協働で探求する活動を通して、学生の成長を図ってきた」とした。その上で「活力ある若者の存在自体が地域を活性化させ、さらに大学の専門的知見に基づき、地域課題解決への提言もしている。地域社会と大学はｗｉｎ－ｗｉｎの関係にある」と言及した。

出版に当たって、住吉副学長は「この書籍で紹介している松本大での経験を産大でも生かし、地域社会と大学との連携から学生たちの課題解決力を伸ばしていきたい」とし、「課題設定力、課題解決力はこれからの社会に必要な力。教育に携わる人はもちろん、子育てをしている親御さんにもぜひ読んでもらえたら」と話した。

同書は四六判303ページ。本体価格1660円（税別）。全国の書店で販売中だ。

新潟産大の住吉廣行副学長が元小学校教諭で教育学者の今泉博氏との共著「小学校と大学で未知に挑む力はこうして育つ」

2023年（令和5年）11月10日（金）　柏崎日報

産大レクチャー ア・ラ・カルト〈193〉

無意識の偏見

大石　友子

先日、県内の高校1年生3名から突然、質問のメールがきました。授業の一環で、自らの興味のあるテーマを探求するプロジェクトとして「無意識の偏見」を取り上げたということです。「無意識の偏見に気づくために必要なことは何か」「無意識の偏見をなくしたことによる弊害は出るのか」「無意識の偏見の恐ろしさを効果的に伝えるコツはあるか」という質問です。

世界の政治や環境の変化等、誰もが生き方や価値観の変換を求められる時代です。そこで、求められる価値観の大転換のひとつ「無意識の偏見（アンコンシャスバイアス）」が着目されています。人はそもそも人種や宗教、性別などに無意識のうちに偏見や思い込みを持ってしまいがちです。それを克服し多様性を認め合う社会を実現しようという取り組みです。

各国で取り組みが本格化していますが、日本でも連合の行った調査によれば、95・5％の人が認識していると回答。例えば、女性に対する性差別を見ると、わが国は男女格差は世界146カ国中126位！（ジェンダーギャップ指数2023）。先進国中、最下位という不名誉な立ち位置にあります。このことは特に、女性が社会で能力を発揮する場で大きな障壁となっていて、女性管理職比率の低さなど事例は枚挙にいとまありません。経営学の立場から見ても、労働生産性の低迷が顕著になるなど早急に手を打つ必要があります。

企業経営においても無意識の偏見をなくし、多様性を認めたダイバーシティー経営をめざすところが増加しています。最初の頃は単にリスクマネジメントとしての取り組みであったものがいまや競争優位性の重要な要素として認識され、Google社をはじめとして、年齢や学歴等の属性を一切問わず能力のみで採用する企業も増えています。ディズニーリゾートが園内放送の「レディース・アンド・ジェントルマン」を、「ハローエブリワン」に変えたのも、無意識のうちに刷り込まれてしまう意識を排除する試みの一例です。

それでは、私たちは何をすべきなのでしょう。まず、人間というのは、無意識の偏見を持ってしまいがちということを自覚する。そして意識的に相手の立場になって考える。思い込みではないかと疑ってみる。データや関連情報等を調べることも大切です。

私自身も自分の中の無意識の偏見に気づき、反省することがまだまだ少なくありません。前述の高校生たちのように、次代を担う若い人たちが「無意識の偏見」を意識し、フラットなものの見方で新しい社会を築き上げることを期待したいものです。

（教授）

＝毎月1回掲載＝

2023年（令和5年）11月14日（火）柏崎日報

【新潟産業大学】

地域に学び 地域をおこす

―実践活動レポート―

にぎわいが戻った紅葉祭

新潟産業大学は先月14・15日に、35回目となる学園祭（紅葉祭）を開催した。4年ぶりに一般に開放された紅葉祭のテーマは「黎明」。ここ数年、新型コロナウイルスの影響により、中止や規模の縮小を余儀なくされたが、地域の大学としての紅葉祭を新たに作り上げ、来年以降も参加者に楽しんでもらいたい、という思いが込められている。

紅葉祭は実行委員会の学生を中心に準備から当日の運営まで行われたが、開催にあたっては地域の方にも多くの協力をいただいた。

模擬店では地域の飲食店によるキッチンカーが出店し、行列を作った。子ども向けの縁日などもあり、飲食ブースはにぎわいをみせた。ステージイベントには国の重要無形民俗文化財に指定されている古典芸能の綾子舞による公演や地元キッズダンスチームによるパフォーマンスに多くの来場者が魅了された。

来春卒業予定の池嶋菜央さん（4年）は「産大に入学してから、外部の方を招いて開催するのは初めての経験だったので不安もありましたが、大変多くの方にお越しいただき、うれしかったです。友人や後輩、地域の方と協力し、盛り上げることができました」と最後の紅葉祭を笑顔で振り返った。

実行委員長の本田翔大さん（2年）は「当日まで多くの難題が立ちふさがりましたが、無事に終えることができました。学生や教職員はもちろんですが、地域の皆様にも良い思い出となってくれればうれしいです。来年もぜひ、楽しみにしていてください」と手応えを感じている。

合計で1153名の方にご来場いただき、大盛況で幕を閉じた今年の紅葉祭。改めて地域とのつながりの大切さを実感した2日間となった。

（同大学地域連携センター）

2023年（令和5年）11月16日（木）　柏崎日報

岡山の高校と連携協力

柏専学院　産大ネットのマナガラ

新潟産大などを運営する学校法人柏専学院（梅比良眞史理事長）は15日、岡山瀬戸内学園倉敷高校（本原康彦理事長）と高大連携協力に関する覚書を締結した。岡田式は新潟産大で行われ、両理事長が覚書に署名した。

倉敷高校は全日制男女共学で生徒数約1100人。昨年の高校駅伝日本一。高大協力の内容は、生徒の多様な進路選択の一つとして完全オンラインの新潟産大の通信教育課程「ネットの大学managara（マナガラ）」を紹介する。また両校の探究学習の一環として、マナガラの地域創成プログラム『ラーニングジャーニー』を活用する。この短期プログラムは全国10カ所以上を拠点として展開し、岡山県には和気町（備前）と西粟倉町（林業）の2カ所ある。

高大連携協力を結んだ本原理事長と梅比良理事長（右）＝15日、新潟産大

本原理事長は「新潟産大は本学の理念と一致する。高大連携により人材の地産地消を目指したい。今後、包括的協定に進んでいけるようにしたい」と期待した。梅比良理事長は「マナガラはいろんなところと提携し、今は点と点となっているが、日本全国で面となるようにしたい」と述べた。

2023年（令和5年）11月28日（火）　柏崎日報

【新潟産業大学】地域に学び地域をおこす

――実践活動レポート――

「書の力」が秘める可能性

新潟産業大学に書道部があることを知っている人は多くないと感じている。実は平成22年に創部し、13年目を迎えた今年、新たな門出を迎えることとなった。それは、強化指定部として活動をすること。文化部における強化指定部とはどういった活動に励むことが望ましいのか。運動部に比べ大会などは少ない、遠征に行くこともない。広く知ってもらうにはどうしたらよいのか。

以前より紅葉祭（学園祭）や刈羽村文化祭での書道パフォーマンス、書道体験を行ってきた。昨年度はそれらの活動に加え、積極的に学外研修やボランティア活動を行っている。強化指定部となった今年、私たちが今できることは地域における活動場所を増やすことではないかと模索している。外部指導者の宮嶋美恵子先生にご指導いただき、宮嶋先生ゆかりの地である出雲崎町での活動も少しずつ取り組み始めている。

『新潟産業大学書道部を知っていただくためにも、地域の皆さまからご依頼があれば積極的に地域へ出向き、活動の場を広げていきたいと考えています。『書の力』で繋（つな）がる人と地域の交流の中で部活動の充実と地域貢献をしたいと考えています」と宮嶋先生は先を見据えている。

部長の本間才揮さん（3年）は「まずは部員も増えてきたので、今まで以上に学生同士のつながりを深めていきたい。そのうえで、地域の方々に喜ばれる活動をしていきたい」と考えている。

年明けには、市民団体主催イベントなどで書道ブースを開く予定である。ぜひ、子どもからお年寄りまで多くの人が本学を通じて「書」に触れてほしい。

同大学書道部顧問・廣川友香（同大学地域連携センター）